

2021年度

学生委員会報告書

公益財団法人日本財団ボランティアセンター  
学生委員会

## I. 学生委員会の目的

学生委員会（以下、「委員会」という。）は、公益財団法人日本財団ボランティアセンター（以下、「センター」という。）定款第45条の規定による専門委員会として、学生の様々な意見を取り入れるために設置している（規14号 第1条）。センター事業に関する助言又は提案を任務としている（同 第2条）。

## II. 学生委員

本年度の学生委員（以下、「委員」という。）は、2021年6月3日に行われた第22回理事会において選任された。委員は10名で、センター実習生、地方大学在籍者、留学生、センター事業参加者、ボランティア活動に従事している者などから構成された。委員の選任理由は以下の通りである。

### ・伊地知 里実（北九州市立大学経済学部経営情報学科3年）

北九州市立大学 地域共生教育センター（421 Lab.）の学生運営スタッフとして「若者の食への意識を高める」を目的として、食育イベントの企画・運営、SNSや冊子での広報活動、企業とのコラボ企画、小学生へのキャリア教育など学内から学外まで年齢問わず幅広く活動を行っている。全体をまとめるリーダーの役割も担うなど、九州地方の学生として、また、ボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

（委員長）

### ・遠藤 了（東京外国語大学国際社会学部ロシア地域専攻2年／センターインターン）

大学では、幅広い分野で支援活動を行うボランティアサークルに所属するが、1年生であった昨年度は、コロナ禍において行動を大幅に制限されたため、思うように活動することができなかった。また、高校生の頃、広島のお親族や友人が豪雨で被災する中、あまり力になることができなかったという思いがあり、ボランティアへの意欲は強くセンターのインターンを志願。学生委員会への参加意思も強く、ボランティアに対する積極的な意見や委員長としての活躍も期待できるため。

### ・大久保 由紀（広島修道大学健康科学部心理学科3年）

高校生の頃、町のイベントスタッフやお祭りの運営をお手伝いするボランティアに参加。大学入学後もイベント運営の活動に参加するが、新しい発見が少ないことに疑問を感じ、令和元年台風19号で被災した地域での災害支援への参加を決める。長野県での被災家屋清掃や、りんご農園での泥出しに加え、センターが実施したチーム「ながぐつ」プロジェクトへも参加し、宮城県の丸森町でも活

動。中国地方の学生として、また、G a k u v o 事業参加者としての視点から意見が期待できるため。

・大野 さくら（中央大学文学部人文社会学科心理学2年／センターインターン）

以前よりセンターの事業へ積極的に参加しており、プラチナ未来人財育成塾の学生チューターやオンライン版チーム「ながぐつ」プロジェクトの運営、ボランティアシンポジウムの企画など、幅広く活躍。また、中高一貫であった学校の校風もあり、多くのボランティア活動への参加経験があることや、今年度からは中央大学ボランティアセンターの学生スタッフとしても活動を始めるなど、センターのインターンとしてだけでなく、ボランティアに関心がある学生のニーズや動向についても情報が期待できるため。

・加藤 みなみ（新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科3年）

学生ボランティアコーディネーターとして新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンターより任命を受けて活動している団体「ぼらくと」に所属し、昨年度は広報活動へも注力する。また、独立行政法人 国立青少年教育振興機構の法人ボランティアとしても活動しており、小学生を対象とした自然体験キャンプの企画・運営なども行う。中部地方の学生として、また、企画運営側としての意見が期待できるため。

・立花 和奏（尚絅学院大学人文社会学群人文社会学類2年）

東日本大震災を契機にスタートした尚絅学院大学のボランティアチームT A S K I（たすき）に所属。昨年度は現在も関わりのある宮城県名取市の沿岸にある閑上地区の住民の方々とオンラインで繋ぎ、震災当時のお話を聞くお茶会を実施。また、今年度の夏には、山形県の高校生を対象とした、防災について一緒に学ぶオンライン講座を企画中である。東北地方の学生として、また、企画運営側としての意見が期待できるため。

・玉之内 菖（聖学院大学心理福祉学科4年）

聖学院大学復興支援ボランティアチーム S A V E の元代表。また、東日本大震災の「風化防止の為の伝承活動」や防災に意識を持ってもらうため、学校や防災学習センターなどで「防災戦隊 マモルンジャー」としてショーも実施。G a k u v o 職員が行う大学の授業を始め、センター事業にも多く参加し、昨年度はセンターのインターンかつ学生委員会の委員長としても活躍。大学での経験に加え、元インターンとして、元委員長としての意見も期待できるため。

・永田 侑大（芦屋大学大学院教育学研究科修士2年）

独立行政法人 国立青少年教育振興機構の法人ボランティアとして、小学生以下の子どもとその家族を対象としたプログラムに参加している。学生でありながら、昨年度より高等学校の非常勤講師も務めており、また、全国学生ボランティアフォーラムでは、企画者側として参加。昨年度も学生委員を務めており、近畿地方の学生として、教育者として、また、企画運営側として、昨年度の経験も活かした意見が期待できるため。

・パキニー スー（東京外国語大学国際日本学部2年）

タイ出身であり、高校生の頃にマングローブの植樹や海岸清掃、バンコク市内の地域活性などの活動を行う。また、昨年度は東京外国語大学とセンターで連携して行った、「福島の災害から学ぶ」をテーマにした講義にも参加し、アメリカの学生とオンラインで繋ぎ意見を交換した。センターとの連携事業参加者として、また、留学生としての意見が期待できるため。

・水野 有紗（日本女子大学人間社会学部文化学科2年／センターインターン）

アルバイト先である塾の先生からの紹介で「地域活性化×キャリア教育」をテーマに、陸前高田の中高生が大学生と一緒に地域の未来や自分自身の将来を考える活動へ参加。コロナ禍での活動となったことで、オンラインでの一からの関係作りの苦勞も経験した。昨年度は積極的な人との関わりを自粛して過ごしたこともあり、ボランティアへの意欲は強くセンターのインターンを志願。また、学生委員会への参加意思も強く、ボランティアに対する積極的な意見も期待できるため。

### Ⅲ. 開催概要

開催の日時・場所を委員会で検討の結果、センターとオンラインにて委員会を開催した。

#### 第1回委員会

日 時：2021年6月19日（土）18：00～19：00

場 所：オンライン（Zoom）

参加者：委員10名、職員3名

議事要旨：・委員へのセンター設立趣旨・事業概要説明と質疑応答

・各委員より自己紹介（ボランティア活動を行う動機を含む）

## 第2回委員会

日 時：2021年8月15日（日）14：00～16：00

場 所：オンライン（Zoom）

参 加 者：委員10名、職員3名

議事要旨：オンラインセミナーやボランティア派遣等を実施する上で、  
どういったコミュニケーションがより多くの学生を惹きつけるか。

## IV. センター 事業への提案 及び意見

本年度の学生委員会では、オンラインセミナーやボランティア派遣等を実施する上で、どういったコミュニケーションがより多くの学生を惹きつけるために有効かについてご意見をいただき、事業を実施する際の参考とした。

### 委員からの提案・意見

- (1) 何をやっているのか、どうしてやるのかが大事という意見もありつつ、交友関係が広がることや就職活動に役立つなどの別の視点でのアピールも良い。
- (2) コロナ、おうち時間、オリンピックなど、現在の状況に合わせた言葉を選ぶことで学生のアンテナに触れやすい。
- (3) 大学生が企画したことや、手が届く憧れとして先輩、同世代の人の話を聞きたい学生が多い。
- (4) 大学の先生からの紹介が印象に残る。大学ボランティアセンターからの情報は確認する。
- (5) ボランティア自体が学生にとって遠い存在となってしまう。「ボランティア＝真面目」という印象を持たれている傾向にあり、センターも災害支援というイメージが強くあることから、他の活動のイメージも広げた方が良い。
- (6) これからボランティアを始めたい人向けのプログラム、ハードルが低いものもあった方が良い。

## V. まとめ

本年度は、センターが実施する事業をより多くの学生へリーチし、参加学生やセンターの認知度を上げることを目的とし、委員会を実施した。いただいた意見を本年度事業の参考にし、ボランティア派遣の募集タイトルやWebページ、メールマガジン等々に反映させた。

ここでの意見・提案は来年度以降の事業でも参考にし、より多くの学生がボランティアに関われることを期待して、本報告書のまとめとする。